

受付番号

留学・研究計画書

氏名 松岡 佳奈子	留学機関名 ソウル大学校
留学先国名 大韓民国	留学期間 西暦 2011年3月～2013年2月
研究テーマ 韓国における脱北者政策の変遷から辿る南北朝鮮関係史	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>【研究テーマ説明】</p> <p>分断国家である北朝鮮から韓国に流入した住民は、韓国政府によってどのような存在なのか。韓国政府は彼らをどう処遇するのか。これはその時代の南北朝鮮関係、韓国の北朝鮮認識によって変遷をとげてきた。南北朝鮮間で熾烈な体制競争が繰り広げられた冷戦期においては、韓国亡命脱北者は「反共義士」として国家功労者並の厚遇で迎えられ一方、韓国の資本主義体制賞賛と北朝鮮の社会主義体制批判の広告塔として扱われた。脱冷戦期以降、韓国政府の対北朝鮮基本方針は和解・対話推進に転換し、それに伴い北朝鮮を刺激し和解の障害となりうる脱北者の存在価値は低下した。90年代後半の北朝鮮の食糧危機以降脱北者が急増、中国等第三国在留脱北者の韓国亡命要請が起ること、政府は北朝鮮との外交摩擦や在留国との外交的対応に苦慮した。近年では脱北者が北朝鮮内部情報の重要な供給源として再び政府や人権団体から注目を集めている。</p> <p>本研究は、このように脱北者問題と韓国政府の対北朝鮮政策の相互関連性の変遷を、脱北者問題に主に焦点を当てて考察するものである。今回の留学は特に、「脱北者」「脱北者支援団体」をはじめとする非政府アクターから主に分析することを目的としている。</p>	
<p>【脱北者研究の学術的意義】</p> <p>韓国において脱北者問題は、彼らの韓国社会定着に焦点を当てた社会福祉的視点から主に研究・調査が進められてきた。しかし脱北者問題は上記のとおり、北朝鮮との関係や周辺諸国との外交交渉によって形成されてきた部分が多く、国内政策のみならず対北朝鮮政策、アジア政策からも考察できる多様性あるテーマである。本研究では、脱北者問題と韓国の脱北者政策というミクロ的イシューの分析により韓国の北朝鮮政策、周辺諸国外交の変遷を追うことで、朝鮮半島国際関係の分析に新たな視点を提供できると考えている。</p>	
<p>【脱北者研究の社会的意義】</p> <p>脱北者の大量流出が起こった90年代後半以降、脱北者は東アジア地域全体に広がっており、深刻な人道問題・社会問題として今日世界中で注目を集めている。日本にとっても、脱北者問題はもともと身近で喫緊の難民問題であるといえる。しかし、脱北者が世界的に大きなイシューとなっているものの、未だ韓国以外では脱北者の受容・保護・支援政策がほとんど未整備な状態にある。長年に渡り脱北者の受容・保護・支援制度を整備してきた韓国の実績を学ぶことで、日本や東アジア地域、世界における今後の脱北者政策のありかたを模索することができると思う。</p>	

成果報告書

記入日 2011年 6月 30日

氏名 松岡 佳奈子	留学先国名 韓国	所属機関 延世大学校
研究テーマ： 脱北者問題をめぐる朝鮮半島国際関係 —韓国の北朝鮮政策と脱北者政策の関連性分析を中心に—		
留学期間 : 2011 年 8 月 ~ 2013 年 5 月		
<p><研究テーマ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・脱北者という人の移動は、朝鮮半島国際関係からどのような政治的影響を受けているのか。 ・脱北者という人の移動は、朝鮮半島国際関係、東アジア地域、ひいては国際社会にとってどのような意味を持つのか <p><1年目の研究目標></p> <p>1年目は、「脱北者」を東アジア国際関係の視点から広くとらえるため、南北朝鮮関係、国際関係（東アジアを中心に）、外交政策に関する理論・研究に関する学習に重点を置いた。</p> <p><1年目の研究活動></p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学院でのゼミの受講（統一学方法論；国際関係論；東アジア国際関係；南北朝鮮関係；北朝鮮の政治と社会） ・ゼミでの成果物（期末レポート、各20ページ）： <ul style="list-style-type: none"> － 韓国の脱北者政策の変遷と対北朝鮮政策・南北朝鮮関係との関連性（冷戦期～2007年） － 韓国および東アジア各国（中国、日本、アメリカ、東南アジア）の脱北者政策（1990～2007） － 安保・外交変数からみる脱北者政策の理論化試論：中国および韓国の脱北者政策を例に ・脱北者、南北朝鮮関係、東アジア国際関係に関する研究書、論文、データ（統計資料、法律文書、国会議事録、報道資料）の収集（日本語、韓国語、英語、中国語文献へのアプローチ） ・「ソウル大学統一平和研究院」附属研究機関である「統一ヴィジョン研究所」での研究会への参加（1回） 		

<研究目標の修正>

- ・1年目の研究活動を通じて見えてきた新しい視点は、難民・強制移動民といった「人の移動」からの脱北者の分析視覚の必要性であった。
- ・ほとんどの既存研究において、脱北者は研究主題そのものであり、他の事象と比較されない特有の問題として扱われてきた。すなわち、既存研究は事例研究が中心であり、脱北者 이슈に導入できる理論の精査や理論的分析がほとんどなされてこなかった。
- ・脱北者 이슈を客観的、理論的に分析するためには、脱北者を「難民・強制移動民研究」（人の移動の研究）として位置づける試みが必要だ。すなわち、そもそも脱北者は「難民」なのか否かを問う試み（国際法/国内法上の脱北者の位置づけ）、難民・強制移動民研究における、難民の政治性や難民と国際関係に関する既存研究・理論の援用、他の難民・強制移動民事例との比較の試みといった、（韓国・朝鮮半島を超えた）よりマクロな人の移動の視点での脱北者分析の試みが求められるが、韓国でもその他の国でも、これまでほとんどなされてこなかった。
- ・難民・強制移動民として脱北者を研究することの最大のメリット：脱北者の「政治性」や脱北者と朝鮮半島国際関係との関連性を、難民・強制移動民研究理論や他の難民・強制移動民研究事例の先行研究を援用することで、より理論的、体系的に分析することができる
- ・このような新しい問題関心を踏まえ、2年目には、朝鮮半島国際関係からの脱北者分析というアプローチと共に、難民・強制移動民研究と脱北者分析というアプローチを新たに試みることにした。

<2年目の研究テーマ> ※1年目に扱ったテーマも引き続き研究

韓国及び各国、国際社会における脱北者の法的地位（韓国国籍、市民権、難民地位）に関する研究
難民、移民理論からの脱北者考察

人の移動の政治化（politicization）に関する研究：国際政治と難民・移民研究

外交政策における人権問題の位置づけ：北朝鮮人権問題、脱北者問題を事例に

北朝鮮人権問題の国際化と東アジア国家の外交戦略：国連機関における北朝鮮人権問題の扱いをめぐって

<2年目の研究活動>

- ・大学院ゼミへの参加（移民；ナショナリズム；外交政策論；韓国外交政策）
- ・ゼミ期末レポートの作成
 - 脱北者 이슈の難民理論への位置づけの試み：難民問題の政治化の一時例としての脱北者
 - 韓国の脱北者政策の決定過程分析
- ・文献収集
 - 各国（韓国、中国、タイ、アメリカ等）の脱北者政策
 - 脱北者の国際/国内法的位置づけ：アメリカ・日本・韓国の北朝鮮人権法（案）、難民条約などの国際条約・国内法の内容とその解釈
 - 難民・強制移動民研究：特に、各国の難民政策、難民と国際関係に関する理論及び事例研究の収集
- ・韓国の難民政策、脱北者と難民の関連性に関する文献収集、論文作成（共著への寄稿用）
- ・「統一ヴィジョン研究所」研究会の参加（2回）

<2年間の研究成果>

- ・脱北者関連資料の収集（韓国語、英語）：特に、韓国を中心とする各国の脱北者政策、脱北者と朝鮮半島国際関係、脱北者の国内/国際法的地位に関する英語文献、韓国語文献を60件以上収集
- ・難民・強制移動民関連文献の収集（英語）及び学習
- ・東アジア国際関係、外交政策、難民に関する大学院ゼミの受講による学習（8授業、24単位取得）
- ・脱北者コミュニティ（特に研究者）とのつながり
- ・脱北者、難民・強制移動民に関する若手研究者としての認知
- 研究成果を共著へ寄稿：墓田桂編『難民・強制移動民研究の新境地』（2013年末刊行予定）へ、論文「韓国の難民保護政策」を寄稿。その中に、研究テーマである脱北者に関する文章を含む。

<残った研究課題>

- ・難民・強制移動民に関する既存研究の収集・整理、理論の習得
- ・難民・強制移動民研究としての脱北者研究のための理論・分析枠組み立て
- ・留学成果の発表（研究論文、博士論文の作成、国際会議等での発表）

<留学終了後の進路及び研究スケジュール>

- ・2013年5月31日 帰国
- ・6月1日～ 特定非営利活動法人「難民支援協会」付属の難民研究機関「難民研究フォーラム」事務局職員に就任。（同時に、「難民支援協会」渉外部職員も兼務。）
業務内容：難民に関する国内外研究資料の収集・整理、難民に関する国内外調査・報告、研究会・シンポジウムの開催、年1回の研究誌の発行。
- ・6月15日 墓田桂編『難民・強制移動民研究の新境地』（2013年末刊行予定）掲載予定の論文「韓国の難民保護政策」初稿を脱稿（脱北者に関する文章を含む）。
- ・年度内に、留学中の研究成果を元にした論文1本を査読付き研究ジャーナルに寄稿予定。
- ・2013年9月～ 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 復学予定。
- ・2013年2学期 大学院において博士論文構想発表予定（主査教授1名、副査教授2名の前で発表）。
- ・3年以内に、留学中の研究成果を基にした博士論文を東京大学大学院に提出予定。

<留学の全般的な感想>

学部時代に1年間の交換留学を行ったソウルに、6年ぶりに再び長期滞在することとなった。

所属した大学院の雰囲気は、研究者の卵たちが日々切磋琢磨する、厳しく緊張感のあるものであった。韓国の大学院は博士課程であっても取得すべき単位が多く、はじめの2年間は複数のゼミでの勉強が中心となる。脱北者に対する理論的アプローチのため、東アジア国際関係や南北朝鮮関係などの知識・理論を身につけたかった私は、他の大学院生と同様、ゼミを1学期に2-3コマずつ受講した。すると、授業一つ一つの文献量、課題量、発表数が日本と比較にならないほど多く、これまで日本で研究を行ってきた私には衝撃と苦勞の連続であった。そのため、特にはじめの1年間は、自身の研究対象である脱北者に関する資料収集や研究は多くは行えなかった。(2年目からは、コマ数は少し減らしたものの、他大学院を含めて引き続き大学院のゼミを受講する一方で、脱北者及び難民・強制移動に関する資料収集、論文の構想作りに力を入れた。)

だが、大学院のゼミを2年間受講したことは、研究の基礎作りの重要な作業となった。東アジア国際関係、南北朝鮮関係に関する理論や分析視覚を身につけることができ、研究主題である脱北者問題に関して、単なる事例紹介的な研究に終わらない(既存研究の多くがそのレベルにとどまっている)、理論構築の可能性、分析枠組みの構築方法を考える訓練となった。

それらを研究論文や博士論文に落とし込んでいくためには、まだ整理が必要である。しかし、今後の研究の方向性がはっきりと見えてきたことは、2年間の研究の大きな成果であると思っている。

留学半年を終えた2011年12月にソウルにて長女を出産した。その後は、昼間保育園に娘を預けながら研究を続けた。単身で育児をしながら研究を行う日々は、正直、うまくいかないことも多く、悩みも多かった。

しかし、それでもソウルでの生活を本当に楽しく有意義に過ごせたのは、韓国人の情と優しさに支えられた部分が大きかった。アパートの大家さんや娘が通う保育園の先生たちは、一人で育児と研究を並行する私を気遣い、料理を作ってくれたり、食べ物や生活用品を持ってきてくれたり、週末や時間外に子どもを一時預かってくれたり、育児相談に乗ってくれたりした。娘が腸炎で入院したときには、私が少しでも家に帰れるよう、病院に来て看病を代わってくれた。正月などの韓国の特別な行事の日には、伝統料理や韓国のお餅を作ってもって来てくれ、いろいろ説明してくれた。

大学院の友人たちも、日本との大学院システムが全く異なり、困っている私に、多くのアドバイスをくれ、海外での研究を励ましてくれた。また、地域の人々は外国人にも自然に対応し、病院や役所などの手続きが難しいときも、いつも職員や周囲の人が優しく手助けしてくれ、ソウルでは「多文化社会」への取り組みが日本より進んでいることに驚かされました。

そのような周りの支えがあり、大きな苦勞なく、楽しい2年間があつという間に過ぎた。

また、春休みを利用して、1ヶ月間の「韓国語教師養成講座」を受講し、修了した。この経験を生かし、今後は研究職のほか、韓国語教育にも携わっていきたいと考える。

<留学の写真>



2012年9月。

教授、クラスメートと共に、延高戦（延世・高麗大学校間のスポーツ競技大会。早慶戦に相当。）を観戦。応援する学生たちはみな、延世大学のシンボルカラーである青い服を着て、歌って踊って応援する。実は学部時代、相手校に留学していたので、どちらを応援すべきか複雑な心境。

（前列一番左が私。）



2013年3月。

ソウル大学統一平和研究院の傘下機関「統一ヴィジョン研究所」の勉強会に参加。同研究所の研究員及び勉強会参加者のほとんどは、韓国に定住した脱北者（社会人、大学院生・研究者）であり、勉強会の開始前にはそれぞれの北朝鮮や韓国での経験、今の活動、今後の目標や夢などがフランクに話し合われた。（脱北者の方の身辺保護を考慮し、顔は隠させていただいた。）



2013年2月。

春休みに韓国南部の順天（スンチョン）を旅行。写真は、ドラマ「宮廷女官チャングムの誓い」のロケ地でもある、樂安（ナガン）邑城民族村。朝鮮時代の邑城が状態よく保存されており、城壁の中には今でも100以上の茅葺屋根の伝統的家屋で人々が実際に生活したり、伝統的な遊びや音楽、工芸、伝統家屋宿泊体験を提供している。